

石原純が永年親しんで来た定型の短歌を棄てて、自由律現代語歌を作り始めたのは大正十一年である。この年長詩と短詩おのおの二篇を作っている。長詩は二つともアインシュタインの来日に因んだもので、以後これらのように長い詩は作つたことがないので、例外的作品と言つてよい。翌年の「舞台の黒劇」は関東大震災をモチーフとする作品で、題名の下に（短詩連作）と記されている。さきにこの作者の一大変革の時期を展望した文に「石原純と短詩」と題したのはこの故であつた。

大正十二年の作品は今のところ右の一篇しか知ることが得ないが、同じころ初めて理論を述べたことが注目される。すなわち『週刊朝日』第二二号（大正12・12・1）へ「短歌の新形式について」を發表したのである。この所論は反響を呼んだらしく、同誌第三号（13・1・13）へ「新短歌について」を書き、批評に答えるとともに前論を補足している。題名の上へ「将に来るべき」と別行でやや小さく印刷されているのは新聞社が勝手につけたものである。この著者がそんなことを書くはずがない。

ここで新短歌という言葉が使われているが、新形式の作品をこういうことに決めたわけではない。大正十三年に『日光』同人になるとともにその創刊号（13・4）へ出した一層精しい論文「短歌の新形式を論ず」の中で「短唱数篇」と題されている。私はふと連想することがあつた。伊藤左千夫が「連作趣味論」というのを發表したとき香取秀真は「連作とはいはずに何か他に新熟語を当てた方適切かとも存じ候」という意見を述べた。すると左千夫は「予はそんな名目などはどうでもよいと思ふ。実が主であるから実さへ分つて居れば名目などは世間で勝手にいふがよい」と答えたそうである。（齋藤茂吉「新短歌連作論の由来」全集17・80）

若くして左千夫の門に出入りしたこの人に、似たような発送や言い方があつても不思議でないどころか、ほほえましい気持ちさえ起る。この作者が新形式の作品を新短歌と呼ぶことに落ちつくのは昭和三年ごろと思う。のちにまたこの事に触れるであらう。またその理論についてここで立入ることとはしないが、話の順序として一言でいうなら、従来の五七七七七形式でしかも文語体では、現代のわれわれの「こころを現わす」とはできないから、自由律形式として現代語を用うべきだといふにある。世上すでに口語歌と称するものがあつたが、石原純はこの言い方を採らず、現代語歌という表

現を好んだ。

さて『日光』同人となつた石原純は発表の場を得たので、ほとんど毎号作品もしくは論文や批評などを書き、同人中最も活発な一人となつたが、この雑誌は三十数冊を出して昭和二年に終わりを告げた。その間に作品十数篇（数篇集めて総合的な題をつけたのがあるから篇数は数え方による）と論文など数篇がある。創刊号の作品の一部を前に引用したことがあるが、詳細を見て行くことはしない。なるほど形式は新しいけれども、作風はやはりアララギ的レアリズムに立っていると思う。作者自身はアララギ的とは思つていなかつたであろうが、われわれにはそう見える。それだからこそ従来の短歌形式では表現できないだろうかという実験を試してみる気にもなつたのである（「石原純と短詩」）。

『日光』が出なくなると石原純はただちに新しいグループの結成に取りかかつたらしい。同年十月に『渦状星雲』という雑誌を創刊したのである。新しくできた、おそらく年若い仲間たちと今度は自分が主催する雑誌を持つことになつた。この雑誌は短命に終つたが、さらに新しい雑誌を創ることと数度、主なるものだけで五種はある。

このような活力は一体どこから生じたのであろうか。石原純は大学の研究室を離れたのち著述家に転身するほかはなかつた。その初期には相對論の解説のような、この人に打つてつけの、しかも啓蒙活動としては最高度の仕事があつたけれども、それは恒久的なものでなく、潮が引けば恋愛論の原稿も引受けねばならなかつたであらう。元來研究者であるこの人にはさぞかし欲求不満が蓄積したであらう。そのはけ口が新短歌運動であつたと思う。

またあとで見るように昭和六年前後から作風に変化が見られ、シュルレアリスムを顧慮していると見られるふしがある。もちろんこの人は時流にきそつて乗るほど軽薄ではないが、見るべきものは見ていたことは確かである。そのころ（一九三〇年代）わが國へもシュルレアリスムの波が入つて来て、その國際絵画展覧会が開かれた（今また同類が開かれているのは奇縁である）。その創始者といわれるアンドレ・ブルトンは一時かなり左傾し、対モロツコ問題で政府に反対するなど、いわゆるアンガー・ジユマン（政治参加もしくは社会参加）ということを唄えた。石原純はさきにも述べたようにそういうものに軽々しく同調することはなかつたが、日本の最も不幸な時代には好ましからぬ人物の方に入つていたのである。彼はおだやかな表現のなかに鋭い社会批判をしている（これは「石原純とエッセー」で述べる）。石原純の新短歌運動は彼の生甲斐であつたとともに、この人なり

のレジスタンスであつたと私は思っている。

以下に独立した雑誌を持つようになってからの活動状況を概観してみたいと思う。これまでに見ることを得た資料は未見の部分に対して少いのであるが、それでも歯の化石一個からその動物像を描こうとする考古学者よりははるかに恵まれたことは確かである。

『渦状星雲』（昭和二年十月創刊）

この雑誌は第三号まで出たということであるが、残念ながらまだ一冊も見ることができないでいる。同人雑誌を続けて行くことは極めて困難なことである。これから述べる雑誌の中にはかなり長く続いたものもあるが、これは最も短命であつた。

『三角州』（昭和三年八月 五年五月）

これは第七、九、十、十一、十二号の五部を見ることができたので、半数近くは見たことになる。扉に石原純監修とあつて誌名の下に「新短歌雑誌」とある。内容を見ることにしよう。

第七号（昭和々々）の作品は「梅雨の楽譜」というもので、題名のつけ方から『日光』時代とは異うことに先ず気がつく。

雨滴の楽譜をでもつくらうと、
うつとり

わたしはそれに聞き入つてゐる。

泰山木の

巨大なしろい花をみてきたが、
それもしくかな感傷を
そそののみである。

短歌ならこれで二首といふところだが、二節と言つた方がよさそうである。この作品は十節から成る。初めの二節はいかにも物うい梅雨どきの感じを現わしているが、第六節は次のようになってゐる。

無心でねむたさを
感ずる瞬時でさへも、

おまへひとりのプロレタリアなのだ。

この作品が現われるより多分二年くらい前からプロレタリア短歌運動というのがあつて、齋藤茂吉などもその泥をかぶつたのをわれわれは目の前に見ているのである。そんな時代であつた。同じ号の「消息」という六号記事で石原は「紫花山房漫語」としては、今度はプロレタリア芸術理論について書くつもりでしたが、止むを得ず次号に譲ることにしました」とある。あいにくその次号というのを見ることができないが、この雑誌の他の所をよく見れば考え方の大概をつかむことは可能である。

九(4・6)の「紫花山房漫語」は「芸術に於ける人間的要素」という文で五ページにわたるエッセイである。私はこの人のこの種の文はエッセイと呼ぶのがふさわしいように思う。この号の作品は「偏執」というので九節から成る「印刷してちようど一ページになるという配慮をした場合がかなりあるようだ。

十(4・10)の巻頭言「紫花山房漫語」は「芸術の社会性について」で、内容にふれると長くなるので他の機会に考えることにしよう。作品は「資本主義的有閑者」で、第二節は

平凡をけなして、

みんな感覚錯倒と誇らうとするのでした

資本主義的有閑者の

ほんたうにわるい癖です。

というのである。巻頭文を併せて研究することが必要になつて来る。

十一(4・12)の「紫花山房漫語」は「新芸術観への転向」で、書き出しの所だけ引用しておく。マルクシズムの一種の時代の流行に伴つてその論據とせられた唯物論が亦一般の思想上にも大いなる影響を及ぼしつつあるかのやうに見える。殊にわれわれの関心するプロレタリア短歌の上には相当に之がその傾向を左右する重要な要素としてはたらいっていることも確かであるらしい。だが、かやうにして唯物主義化された芸術なるものは果していかなる運命に終るであらうか。」

この号の作品は「紙片の区劃」というので第四節あ

紙片の区劃を一つ一つに埋めて

それで

せめてもの生命を燃やさうとする。

となつてゐる。あの端正な字を書くこの作者が、原稿用紙の区劃を一つ一つ埋めて行く姿が目に見えるようである。同時に文筆家になつた後半生の感慨がにじみ出ているような気がする。

十二(5・5)には石原の作品も載つていない。このあとは出なかつたらしい。号数の下の数字は雑誌奥付にある発行年月日で、前の号からだいぶ開いていることが知られる。この雑誌は過半数が未見であるが、それでも以上の番号によつて唯物論大流行の時代のこの著者の在り方が大体想像できそうである。

『短歌創造』(昭和六年二月 八年六月?)

これは全部で十六冊見ることができた。一の一(9・2)の巻頭に「所信を述べる」という二ページの文があつて、その中ごろに次のような一節がある。

短歌は一つの詩でなければならぬ。詩の精神を失つた處の短歌はもはや何等の芸術的價値をも有しないであらう。定型短歌の主張者等は短歌の特質を定型にのみ置いて其他を忘却してゐるかのやうに見える。そして自由律短歌を短詩に過ぎないとなし、之を短歌圏外に驅逐しようとしてゐる。かやうにして短詩から独立せられた定型短歌それ自身は同時に詩の精神をも見失ひながら、尚ほ定型に従ふが故にのみ短

歌として取り扱はれてゐる多数の例を我々は見出す。何と云う滑稽な

アイロニーで、それがあつたらう。(傍点は原著者)

短歌が詩の一つであるというのはその通りだが、自由律短歌を短詩といわれるのは不満のようである。以下は憶測に過ぎないが、石原純は歌壇では古くから知られていたけれども、新形式の作品を書いてゐるうちに自分は詩壇の人でないことを思うようになったのではないだろうか。最初のころは「短詩連作」などとみづから名づけたこともあり、また名称などどうでもよいと言つてはみたものの、新形式の短歌つまり新短歌と呼ぶ方がよいということになつたのであらう。

さて作品の方は「童心」と題するもので、初めの二節は次のようである。これまでの作品も含めてみな連作形式になつてゐるので、通して見るべきだが長くなるので、部分を引用するにとどめる。

ひそかな童心をいだいて

あの社会人らに遇ふのが
いつも嫌悪される。

壁面の

微細な亀裂にみいりながら、
わたしは

自然科学者であることの幸ひを感じる。

三節とばして

経済戦はいづこにも酣である。

ふところに

いち枚の紙幣を探りながらも

ふと、さびしさに魅入られる。

また一節とばして

灯の街を歩まう。

そこには眼のふくらんだ

蝶と蜻蛉とが飛んでゐる。

妖精の具象化のやうに

女は微笑する、

そして羞恥する。

私は何となくロートレックの絵を連想する、こういう世界もあるという
意味で。同じ号の「消息」という六号記事の終りで純は「数奇屋橋の傍ら
の酒場瀟々園は今度すつかり山田順子氏にお任せすることにしたので、折
があつたら御立寄の上、彼女の春のごとく朗らかなサービス振りにお接し
下さい」と書いている。このCMはあとを引きついでくれる人のために、
責任感の強いこの作者が買つて出たものであるうが、むかし「ブルー・エ
ンゼル」という映画でマルレーネ・ディートリヒ扮する踊り子に魅せられ
たギムナジウムの教授が、プロマイド賣りになつて「チープ・カード！」
と呟く場合を思い出させた。しかしこの「消息」の引用はそれを言うため
でなく、前掲の作品を味わうのに参考にならうと思つたからである。

一の二(6・3)に「全反射」と題し九節から成る作品がある。その第七
節は次のようである。

片屋根の傾斜に残つてゐる雪が

やがて解消する運命をかこつてゐる。

ルンペン労働者のはかない歩みのやうに。

昭和六年といえ、ルンペン・プロレタリアートなどという言葉をよく耳にしたものである。この作者にはスノビズム汚染のようなものはないが、時代の反映が見られるのは寧ろ当然であろう。

一の三(6・4)の巻頭に「自由律短歌への転向者」という文がある。(転向者は時代語の転用で軽い批評を感じさせる。)初めに「自由律短歌は今漸く常識的にならうとしてゐるが、それでもまだ一般的に行き届いてゐない」とあつて、少しさきに「私が実際に自由律短歌を作り出したのは、もう十年の昔になる。……京都の高草木暮風氏等が雑誌『露台』によつて謂ゆる内在律と称する自由律的な短歌を公けにされてゐたことは、凡そ一年後に親しく同氏からの書信によつて始めて知つたのであつた。雑誌『日光』が廃刊されてからは主として之に議論や作品を載せてゐたが、それ以外に多くのほかの人々と交渉をもたなかつた。その後新短歌協会が成立して雑誌『芸術と自由』が其機関誌となるに及んで、専ら之に私の信ずる處を發表した。」とある。

これを読むとこの人の作品と議論を全部集めるのは至難の業であることが分る。しかし全部集めなければ作風や論旨が分らないというものでもあるまい。これは思いつきだが、前掲高草木暮風の「内在律」という言葉はシユルアリズムの創始者アンドレ・ブルトンが「モデル・アンテリユール」(内部模型)と言つた発想を連想させる。それは一九二〇年代のことである。蛇足のついでに、さきごろ竹内敏雄「詩の死」(日本学士院紀要、三七の二、56・二)を見ていたら、すでに十九世紀末から今世紀にかけて西洋の詩は定型から自由律へ大きく傾いていくという。日本の短歌は少し違つたろうが石原純のごときは世界のそういう大きな流れの中に立つていたのであろうか。

この号に出ている作品は「春の郊外気分」と題するもので、第一節は

公設市場のあかい旗が

春の風に揺れてゐて、

郊外のま昼間はまどろんである。

ここには資本主義も階級闘争も登場せず、当時の流行語でプチ・ブルジョア的かもしれないが、作者が一城のあるじの意識を離れてアート・ホームの感じで散歩でもしている姿がほつと、ふつとする。

一の四(6・5)の巻頭に「現実の意味」という文があつて、最初の部分に「リアリズムは通常哲学では実存論とか実体論とか云はれ、芸術上では写実主義とか現実主義とか云はれる。近頃は之れに基いてシユール・リア

リズムとか、プロレタリア・リアリズムなどの言葉も用ゐられる、云々」と述べているから、著者は超現実主義芸術理論を十分顧慮していることが知られる。前にも述べたように、この人は流行に飛びつくようなことはないが、超現実的手法でもよいものは使うという開明的な所がある。ただ「シユルレアリスムの手法によれる」などというレッテルを貼らないのである。

同じ号の作品「感覚の浮揚」を見るがよい。

朝の空気層の一带、
感覚は浮動となつて
浮揚する。

第二行は「感覚は波動となつて」の誤植と思うが、いくらか超現実的ではあるまいか、もう一説引用すると

陽のあたつた草園で
ひそかに
心の陰影をいどる。

取り立てて超現実的などと言わないまでも、これまでの作品と少し違つて来ていることは明らかであらう。同じ号の合評会の記事中で石原純は「カンチンスキーなどの絵でもさうだが、描いた人が、どんなものを現はさうとしてゐるのか、見るものに分らなかつたら、作品としての價値が無い訳である。」と述べている。だから抽象主義芸術理論や超現実主義のことなどが当時彼の頭の中に巣くつていたことが知られる。カンチンスキーが現実主義と百八十度離れたものであることは改めて言うまでもない。

これも蛇足だがカンチンスキーの抽象画の最初の作品は第一次大戦のことだといふから、ブルトンが『超現実主義宣言』を出したのはそれよりも十年も遅いことになる。両者の理論は違ふというが作品では区別できないのがある。ラルース『大百科』 筆者の知識ではこの程度 ではシユルレアリストのグループに属する人の作品または彼がこれはシユルだといふ作品がシユルレアリスムの作品であると言ふ他はない、といかにもフランスふうの解説をしている。いま絵画を對象として言つたが、これは文学と芸術にわたる大きな運動となつた。石原純のグループにも超現実主義を意識した作品が現れるようになる。しかしその例まであげるのは本稿の目的ではない。

この号の巻末の広告のページに「短歌創造叢書」第一巻石原純歌集（題未定）とあり、このあとにも数回同じものを見るが、結局未刊に終つたらしい。

一の十(9・11)の「秋」という作品の第四節に

無数の銃弾が

からだ一ぱいに打ちこまれた

ふしぎな夢を見た。

すずかけの葉が荒々しくゆれる。

とある。これだけから夢判断をするのはむずかしいが、この作者が十数年前に恋愛問題で世間から非難されたことと無縁ではあるまい。ブルトンの立場ならブルジョア社会の道徳など否定しているのだから、弁解の必要などはない。恐らくこれに近い心境だったかも知れない。(詳しくは彼の『恋愛價值論』を見るがよい。) 詩人アポリネールに女友達マリー・ローランサンがいてもフランスでは話題にもなるまいが、東洋の君子國にはひまな人が多過ぎたようだ。

一の十一(9・12)に「感情の味覚的分析」という作品がある。八節中初めの二節をあげておく。

無限のしづかさ、

原子音楽のさまざまな微妙な形式が

じつと心に触つてくる朝。

大気は不気味に笑つてゐる、

うつすらとした光のなかで、

冷たい大地をつつみながら。

一の十二(7・1)の「吉濱真珠庵即興」の第一節は

よしはまの、吉濱の

うつくしい蜜柑山

暖かい冬には

みかんが黄いろく光るよ。

即興というから軽いもので、白秋調を感じさせる小品である。文章に「随感」がある。

以下は飛びとびになる。これまでのように感想を交えながらでは冗長になるから、作品と文章のリストだけ記しておく。

二の二(7・3)「新短歌形態論(一)」と作品「メフィストのせりふ」

二の五(7・5)「新短歌形態論(二)」

二の六(7・6)作品も文章もないが、巻末に『詩と方法』(第一冊、五月刊)の広告文があつて、石原純の評論「文芸と科学」が載っている。

二の七(7・8)「新短歌壇時言」という評論、作品なし。

三の一(8・1)「現実と超現実」(評論)は超現実主義への関心の証拠、「畸形なる存在」(作品)

三の二(8・2)「華麗なる街衢」(作品)

三の三(8・3)「振假名問題について」は二段組一ページの短いものだから埋め草かも知れない。これまで評論と記したのは一段組で数ページはある。なおこの号に「石原純博士に聴く会」という座談会記事がある。

三の四(8・4)「啓蟄の日」(作品)

三の五(8・5)純の作品、文章ともになく、終刊とは書いてないが、この号で終りらしい。

『立像』(昭和九年三月 十二年四月)

この雑誌は三十六冊出たというから『日光』とほぼ同数である。初めの十五冊とあと飛びとびに計二十七冊見ることができた。

第一輯(9・3)すなわち創刊号に「《立像》刊行の趣旨」というのがあって、その中に「我々の新短歌は我々の心理的に意識する或る一定限度の詩的内容を表現するための一詩形に外ならない」という所がある。これは前の『短歌創造』の後半に見られるのと変らない態度で、作品のスタイルも似ているが、行をあまり改めない書き方が少し異なっている。これは別に本質的なことでなく、雑誌が変わったからタイプグラフィも更新したくらしいの事かも知れない。しかし素人考えでは、せめて行でもかえて書かないと散文だか詩だか、区別がつきにくくなると思われる。理論的に言えば、ポエジーがあるかないか、これが決め手だというが、それがはつきりしないので困る。作品を見ることにしよう。「作品六章」の第一章は次のようである。

ある朝 樹液が逆流して土を溶かした。

ゆふぐれ 感覚がこころと背くみづからを体験した。

これはもう絵でいうなら具象ではない。ピカソでも見るときのように、何を表現しようとしたのか戸惑いを感じる。あれこれ想像してみても答えは数学のように一義的ではないらしい。そこが面白いのかも知れない。

二(9・4)の「歪んだ太陽」の第一節(章)は

太陽が歪んでゐる。春のちまたに、ひとりの青年学徒はその幻を遺失した。

学徒出陣はこれより余程のちの事であるが、今この詩を読むときそんな連想が起るほどに危険な前ぶれが感じられる時代であった。

同じ号に「新短歌に於ける分化傾向」という文があつて、その中に次のような所がある。「私は前号の刊行の趣旨のなかで、新短歌の前途の多岐なるべきことを述べたが、実際に於て人々は既に十分にその傾向を観取することができらうであらう。外部的にのみ《立像》を眺める人々は、例へば現に短歌新聞三月号に於けるS・V・C氏の歌壇時評の如きは、一概に之を超現実的なものとして評し去らうとしてゐるが、詳細に鑑賞してゆくならば、決してそれが必ずしも同一の道を進むものでないことが明らかにせられるであらう。」

これを見ると石原純の作品だけについてではないが、当時の歌壇で『立像』の作品に超現実派傾向を見ていた人がいたのである。この著者はこの評言の必ずしも当つていないことを言うが、そう見られる作品もあつたように見受けた。しかしこのことは当面の課題とは直接関係のないことで、ただそのような感想が浮んだだけである。

三(9・5)の作品は「葱、莨、赤いんく、阿片」で、この題はいろいろのオブジェをキャンパスの上に描き散らした絵の感じがしないでもない。それではどんな詩か。余り長くないので全部引用してみよう。

ふたつの垂直な振動は まさにリサージユの図形を描きました。

そこで葱の匂ひを嗅ぎたい気がします。

我執、猜疑、そして人々は莨をあまりに飲み過ぎるので、うつくしいお伽話をみんな忘れてしまひます。

針金の接触のかげんで電流は断絶する、だが、彼は赤色化を疑はれながら いつも赤いいんくで指を染めてゐる。

左翼論者はなぜみんな公式化するのでせうか。阿片はなぜ人を酔はせるのでせうか。そして、経済はなぜ破綻し易いのでせうか。

物理学者だから物理用語も飛び出す、それはオブジェのようなものとして、余りこだわらずに読んでよいのである、もつとも一応意味を知ることが必要であるが。第三節を読むとき筆者がこの稿の初めで言つたことを想起していただきたい。赤いいんくで指を染めているのは校正でもしている所であらうが、皮肉でもある。

四(9・6)の「チーズ、抒情映画、オゾン、梅」、五(9・7)の「Tonfilm」、六(9・8)の「変調」、七(9・9)の「暑夏の歌」も似たような表現形式によつた作品である。

八(9・10)に「新短歌に於ける心理主義」という論文がある。「題して心理主義といふ。それが妥当であるか否かを論ずることは暫らく措いて、今我々の重点を置かうとする一つの目標に対して便宜上この語を用いるに外ならない。」という書き出しで、つづけて言う。「必ずしも新短歌に限ることなしに、広く文学若くは芸術に於て実に多くのイズムが掲げられて来たことを我々は知つてゐる。最近に我々の関心する短歌に於いても、或は現実主義が稱へられ、超現実主義が試みられ、若くは即物主義が語られる。種々の之等のイズムに対してはその特質を比較して考へることは我々にとつて決して無益であるとはしないが、今ここでは私はその餘裕をもたない。私はむしろ極めて直截的に私の所論の中心に進まうと思ふ。」

詳しく述べると長くなるので、結論とも見られる最後の一節を読んでみよう。ここに述べた心理実験は現実的な条件の下に於て行はれてもよいし、若くは謂はゆる超現実的な方法に於て試みられてもよいことは勿論である。芸術に於ける超現実的なものは単なる妄想ではないのであつて、現実の心理を展開させるための一つの手段でなければならない。要は我々人間の心理における微妙な動向に徹するにある。そこに或る創造的発見が追隨し得るであらう。かくして新短歌に於ける心理主義はこの意味に於て成立し得るのであり、そして之に独自の價値を与へることができるであらう。」(傍点は矢島)

これはアンドレ・ブルトンらの説に一脈相通ずる所がある。彼らは理性の制御を受けていないシユブコンシアン(意識下)の心の動きを重視する、その方が真実であるからだ。それは眠りに入る直前または熟睡後の浅い眠りのとき知ることができる。このため彼らが催眠術まで使うのは行き過ぎのような気もするが、夢の中で考えたことの方が真実である場合は確かに存在する。

石原純はシユルレアリスムの核心を把えており、むしろこれを自家薬籠中のものとしていたように思われる。ただこれを振り回すことはしなかつた。以上は思いつきを書きつけただけで、機会を得てもっと精しく考えてみたい。

あまり長くなるので、これからあとは作品となる文章だけ記録して研究の資料にしたいと思う。

九(6・11)巻頭に「エッセイ」という欄があつて「芸術としての短歌のモラル」、作品は「都会の哀愁」五章(一ページ)。

十(9・12)この号には自作自註という変つた編輯をしたのがある。次にこの作者の歌と自註をあげておく。題はない。(この号の奥付に第十輯、第一巻第十号とあつて巻号併記となる。)

乱雑な世相におののく。唾液の殺菌効果が薄れ、リトマス紙はみだりに青く色づく。

この作の動機は説明する迄もないと思ふ。

唾液の殺菌性があればこそ、我々はそれを意識しないまでも、安心して食物を摂ることが出来るわけであると云ふのに、若しそういういふことがなくなつたら、我々は何物に対しても一々用心してかからねばならぬやうに脅かされるのである。そして徳義もなにもない図々しい人間が濶歩するやうになつてしまふ。そこでリトマス紙に真赤にいろづけるやうな、強い酸性の薬品でも欲しいといふことになるが、さう云ふ薬品を果たして何に於て求めたらよいのか、これは不安の世相に対する一つの重大な問題でなければならぬ。私はこの作によつて、さうした疑問を社会に投げかけたい気がする。

時は昭和九年(一九三四年)、歴史年表を見よ。

十一(二の一・10・1)作品「うつろな感傷」、文「短歌に於ける実験的
工作」

十二(二の二、10・2)作品「赤風車劇」、文「再び短歌に於ける心理主義について」

十三(二の三、10・3)作品「陰影を伴ふ風景」

十四(二の四、10・4)作品「Phanomen」

十五(二の五、10・5)作品「占籤大吉」

十六(欠)

十七(二の七、10・7)作品「原始的な科学」、文「スタイル、フォルム及びリズム」

十八、十九、二十(欠)

二十一(二の十一、10・11)作品「光は錯行する」

二十二、二十三(欠)

二十四(三の二、11・2)作品「永遠の火」、文「新短歌概論(一)」

二十五(三の三、11・3)作品「ひとつの道標」

二十六（三の四、11・4）作品「Fossil」、文「新短歌概論（三）」
二十七（三の五、11・5）文「新短歌概論（四）」
二十八（三の六、11・6）文「新短歌概論（五）」
二十九（三の七、11・7）作品「社会相」、文「新短歌概論（六）」
三十（三の七、11・7）文「新短歌概論（七）」
三十一（三の九、11・9）文「新短歌概論（八）」
三十二（三の十、11・10）作品「黒体輻射」、文「新短歌概論（九）」
三十三（三の十一、11・12）巻頭言「歌人協会の改組について」、作品
な。

このあと昭和十二年四月号まで出たという。

『新短歌』（昭和十二年五月 十八年六月）

これは石原純が主宰した雑誌の最後のものである。つまり戦争が烈しくなつて出せなくなるまで続けられたものである。筆者が冒頭でレジスタンス云々と述べたのはこの点にかかわる。足かけ七年にわたるので、かなりの号数が出ているはずだが、今のところ第六巻の一部しか見ることができない。それらに見られる作品はついに晩期のものとなつたので、省略なしにここに掲げてその作風を偲ぶことにしよう。

六の一（14・1）新春の哲学

新春の光は いつも なごやかである。『支那さん』といふ
ことばの響が 妙な匂ひを もつてゐる。

東亜協同の『心』をもとめる。空の星らは どれも スペクトル型で
選り分けられてゐる。

『無思想』の思想を 説く人がある。みんな 眼かくしを されて、
手をつなぎあふ。

蹠くわくのうつくしい 少女たちが 舞踏する。ひとびとよ、いのちと
知慧との みじめな分裂を いましめよ。

氷の しづかな寂寞に 真理がこもつてゐる。だから風邪をひかぬや
うに

思索の手ぶくろを著けるがよい。

なおこの作品は昭和十八年に出した随筆『夾竹桃』に再録されている。それだけ作者の心に残るものであるう。

六の二（14・2）人生の問題

人間のこころは かつて 神のやうに淨かつた。だが、大気の平凡な匂ひが やがて 彼等の蒙を啓いたのだとしたなら。

すべては愉しく 日々の働きに 堪へてゐるのであらうか。驢馬は草を食みながら瞬間の杭に つながれてゐる。

温室のなかで 植物は 季節を見うしなひ、かくて 歴史の悲劇を人々は さりげなく 語る。

なおこの号に「全体主義と組織」という巻頭論文二ページがある。前号から「新短歌の確立」という新春座談会記事が本号で完。

六の三（14・3） 巻頭に「芸術に於ける普遍性」という論文があるが、作品はない。

六の四（14・4） 巻頭に「科学的精神と生活」、作品は 数理の謎

赭あかぐるい織條が しら壁をしきつて、あはれ、抽象ヒルベルト空間の奇態な風情に 想ひを凝らしてゐる。

ほのかに 榛の木の芽が 萌え出たといふのに、多様な バルカン民族のうへには 季節のない風が ふき暴れてゐる。

むづかしげな数式がならんでゐる。原子核がふしぎな分裂を見せて、精神病者を哭かしてしまつた。

六の五（14・6）巻頭に（随想）「芸術に於ける現実性について」、作品は次のとおり。

世界の憂鬱

つゆどきのこの湿潤しつじゆんに 神経痛を病むといふ。せめて麝香の匂ひぶくろを 彼女にささげよう、奇蹟のない世ではあらうが。

巷でおほ声をあげてゐるのは、あれが若しも偽善のひとびとであったとしたなら おゝ、信天翁がうしろでよろよろ歩いてゐる。

形容があかるくくづれてゐる。そんな魅惑をもとめて、ミルトンの樂園に こころのつばやきをおぼえる。

玩具が陽気にならんで、ちひさな人生の縮図をひろげる。だが、あの無邪気な子どもたちでもが、どこかに世界の憂うつを感じてゐる。

なお以下の四篇は制作の年月から見て『新短歌』に発表されたものではないかと思う。前述の随筆『夾竹桃』の目次の終りに近い所に「ひとり言、楽譜の言葉、人と梟、新春の哲学、複雑怪奇の歌」という一括して一行になつてゐるのがある。このうち「新春の哲学」が『新短歌』（昭和四年一月号）に載つたことは前に述べた。残りの四篇も制作年代から見て同じ雑誌に発表された可能性が大きい。例によつて発表した場所はなく、制作年月だけ末尾に書いてある。

ひとり言

みだりに豫言を信じ、仙人掌は あの奇妙な姿態を 形づくつてしまつた。

ふたつの扉がある。ふたつの道がある。心を愛しめと、かつて 神を誡へた。

初夏は 雨を吸つて 樹々の会話は愉しげであつた。でも地上は 再び憂うつな人々に 充ちてゐる。

鮎の子が流れ水に生れ、山葵は 辛味をつよくする。世相の転換を つましくかへり見よ。

夢遊病者の瞳は 妙に 動かずにゐる。金雀枝の花は 黄いろく 垂れてゐる。

背すじの赤い書物が はにかんでゐる。この書齋は すこし閑散すぎる。

(昭和十三年六月)

楽譜の言葉

瞳をひらくのを惧れる。星雲は 空のかなたで 永却を かたちづくる。

不自然な重さを愛する ひとつの心理。春は紅衣裳をかかげてもういつか去つてしまつた。

气象台では いつも 風速計がまはつてゐる。人間には 時として 陽炎が楽し過ぎる。

空間は危ふく方向を失ひかける。ふと気づくと、エジプト文字が いたも古風に 踊つてゐる。

純真なるが故に 莓実は あかるく美しい。ドン・コザック合唱團を 聴いてゐる。

音波は 空気を しづかに揺るがしてゐる。眼にふれない ふしぎな 色彩を味ふ。

(昭和十三年七月)

人と梟

莊嚴な夜の、だが いても奇態な夢を趁つて、気紛れな運命は 緑色である。

神秘が 人のこころを捉へ、鴉片のにがさに 惑溺する。人間の悲哀

はそのさかしさから生れる。

あるときは 浮世絵風な描線を 愛で、背神者の魅惑を 忘れかねて
ある。

論理は まだ 物と心とを 支配するに足りなかつた。脆弱な女は
いつも神性化されてゐる。

あらゆる人間闘争を 想ひながら、彼は唾液を嚙みくだした。どこか
で 鼻の眼が きよとんとしてゐる。

朽ちてゆく民族の あはれな姿 みる。菲の茎が しきりにほつて
ゐる。

嗅覚の ふしぎな効果に ふと さみしさを感じる。 毒ガスの襲撃
を 恐れよ。

(昭和十三年八月)

複雑怪奇の歌

巷でおほ声をあげてゐるのは、あれが若しも偽善のひとびとであつた
としたなら

おゝ、信天翁あほうどりがうしろでよろよろ歩いてゐる。

玩具が 陽気にならんで、ちひसान人生の縮図をひろげる。だが、あ
の無邪気な子どもたちでもが、どこかに 世界の憂うつを 感じてゐ
る。

人間は ふしぎにも愚かな生きものである。知らぬ間に 魔法の色硝
子を もたされて、お互いを透き見しながら 争いあつてゐる。

葡萄酒の渋みを味ふと、ふと 靈感が湧いてくると いふ。でも乾ら

びた人々には いと縁遠い もの語りである。

夢が みんなほろびてゆく。この空気は きめうな毒気を もつてある。さて、この世はかくて どんな光に 照らされてゆくのであらうか。

(昭和十四年十一月)

ところで、この第一、第二節は前述の「世界の憂鬱」(十四年六月号)の第二、四節である。そこでこの二節を活かし、新たな三説を加えて改作し、新しい題をつけたのではあるまいか。このような改作の例は『日光』にもある。ちなみに昭和十四年八月二十八日、平沼内閣は欧州情勢は複雑怪奇を表明して総辞職した。新しい題はこの事実を踏まえていることは疑いない。

附記

上記の雑誌については、まだ見ていない号数の方が見たものより多いのであるが、資料集めが壁に突き当たったので、新短歌の調査報告は一応これで終りとする。上記の石原純主宰の雑誌以外にも作品を出したという記録の残っている雑誌がいくつか知られている。そのことの一端は前にも記したとおりである。しかしそういうものまで探し出すのは容易なことではない。

石原純の短歌の調査を始めたのは今から一年前のことである。すなわち一九八一年七月某日、科学史研究の仲間である日本大学理工学部の西尾成子君ほか一名が来訪せられて、石原純について話をききたいとの由を告げた。私が石原純と面識もあり多少とも知っているからである。聞けば西尾君らは石原純のことを調べているという。私もこの大先輩には関心を持っており、戦後の空白の時期にその科学論文の目録くらいは作っておきたいと思い、学会誌などを調べたことがある。そのときの資料の袋を取り出してみると、論文目録は未完成のままだが、この著者が一八八一年の生まれであることに気がついた。

そこで何はともあれ「石原純西端百年」という一文を草して雑誌『科学史研究』に掲載せることをはかり、西尾君に科学的業績部分を書いてもらい、残余の所を私が埋めて同誌一九八一年秋の号(十一月発行)に間に合った。その残余の部分には短歌に関する事も入れるのが当然であるが、その部分は角川書店の雑誌『短歌』一〇月号に載せてもらうことになった。

西尾君らにおよそ九〇分話した中には歌集『鬢日』を高等学校の学生時分に読んで歌を作るようになったとか、『三角洲』という雑誌もあったとか、そんな話があった。そうすると西尾君らはそういう資料集めましようというのである。そこでまず『馬酔木』(以下アシビ)と『アララギ』から石原純の作品をコピーすることを頼んだ。『アシビ』時代には石原阿斗志という記名であることも話しておいた。この二つの雑誌は複製版も出来ているから、労力はいへんだが、理論的には簡単なはずであった。ところが『日光』以下になると話は別であった。図書館へ行けばあるだろうくらいに安易に考えていたのは誤りであった。

そこで私は旧知の東北工業大学主任史書の大森一彦君に助け船を出してもらうことにした。同君は寅彦研究誌、日本におけるフアラデー研究史などをやっておられ、『ろうそくの科学』という本は一八種類出ていることが所蔵されていることを教えてくれた。それを西尾君がうつして来るという寸法である。『三角洲』『短歌創造』『立像』は立命館大学図書館に、『新短歌』は国会図書館に一部分ながらあることが分り。コピーが作られた。

また大森君は各種文学辞典の類に出ている石原純に関する記事をコピーして知識を授けて下さった。それによって中野嘉一氏に助力を願うべく西尾君に尋ねてもらったところ、同氏の著書『新短歌の歴史』をわれらに賜り、大いに益を受けた。われわれの目的は言うならば「石原純、その人と業績」ということであって、この業績の中には科学と文学を含めるのである。その文学の主要部分は短歌と新短歌であり、これには当然歌論を伴うのであるが、われわれはそれをも石原純の書きものとして見ようとするのであるから、日本短歌史の流れの中でそれを見ることは中野氏の著書のごとき専門書によるべきである。同氏は『新短歌』の同人であられた。

私はこのようにして居ながらにして、『アシビ』『アララギ』以下の諸雑誌に発表された石原純の全作品を眺めることができた。周到な西尾君は作品および文章だけでなく、消息その他の六号記事に至るまで、凡そ石原純に関係する所はことごとくコピーされたので、それらを十分使えばいろいろ精しい研究ができるはずである。それらはこれからの課題となるであろう。短歌および新短歌の資料調べの中で若干の感想を述べた所はあるが、研究的にみるならばここにも多くの課題があるはずで、石原純研究は終わったところか、まだ小手調べの段階である。

また「石原純と短詩」以下の四編を雑誌『ももんが』へ載せてもらうことができたのは編集者田中隆尚君を初めとして同人諸君の好意のたまもの

である。この雑誌は創刊以来続けて寄贈を受けており、二十周年記念号にもお誘いを受けたが、そのときは書けなかった。今回二十五周年記念号に応えたあと、今度は好意に甘える結果なったらしい。

ここで上記の諸君に深く感謝する次第である。とくに西尾君に対しては、これらの調査報告が同君らの研究に対して多少とも役に立つなら、いささかその労に報いることができようか。